

不況と戦争の時代（1931－1945）その8

《1936年、小河内ダムを巡る水利紛争の調印式の日、2・26事件》

1936年（昭和11）は、小河内ダムを巡る東京と神奈川の水利紛争が解決し、また下流に田園調布取水堰が建設された年です。今回は、小河内ダムをめぐる逸話を紹介しましょう。

東京市は、大東京を実現するため、水を求めて多摩川上流に小河内ダム建設を決定し、1932年（昭和7）、東京府にダム建設を認可申請します。945世帯が水没する小河内村は、東京市の説得に止むを得ず受け入れ、東京府が認可して東京市が用地買収に入ります。

この上流の動きに対し、神奈川県が猛烈に反対します。下流の二ヶ領用水が必要な水を取れなくなることを危惧したからです。内務省は、東京府と神奈川県の水利紛争の調停に努力し（注1）、1936年（昭和11）、二ヶ領用水の取水施設改良費などを東京府が負担することで決着します。

東京府と神奈川県は、調印式を、2月26日に都心で行なうこととします。ところが、その日の未明、2・26事件（注2）が発生。この不穏な事態に、調印は延期され、事件が終息した3月2日、内務省土木局長立会いの下、両知事が調印しました。

そして、1938年（昭和13）、小河内ダムの起工式を迎えます。ところが、ダム本体工事は、戦後になりました。1943年（昭和18）、本体工事に入ろうした矢先、海軍の命令により、コンクリート打設に使うケーブルクレーンを供出させられたからです。

このケーブルクレーンは、アメリカのフーバーダム（注4）で使用されたものでした。小野基樹（初代ダム建設事務所長、注3）が、1936年（昭和11）、国際大ダム会議のために渡米した際、格安で買い付けたのです。

戦後、ケーブルクレーンが下関に存在することがわかり、取り戻して再度据え付けて工事が再開される運びとなりました。アメリカ生まれのケーブルクレーンは、戦争により数奇な運命を辿りながら、日米の架け橋になったのですね。

注1：内務省は、東京府と神奈川県協議が始まる直前に、神奈川県知事を東京府知事に移動させますが、水利紛争は長引き、内務省土木局が調停に乗り出しました。

注2：陸軍の一部の青年将校らが、首相官邸や大臣私邸を襲撃した事件。岡田啓介総理大臣は助かりましたが、高橋是清大蔵大臣らが殺害されました。

注3：小野基樹（生没年：1886－1976）は、京都帝国大学土木工学科卒業後、重力式コンクリートダムやアースダムではなく、我が国初のバットレス式ダム（壁式中空鉄筋コンクリートダム）を建設しています。

注4：フーバーダムは、コロラド川に建設された高さ220mのアーチ式コンクリートダムで、水利用と発電を目的としています。1936年（昭和11）に完成。当時世界一の規模でした。貯水容量は、約350億m³であり、琵琶湖の貯水量の約1.3倍、小河内ダム貯水容量の約200倍です。生み出された水と電力により、ラスベガスが建設されました。

写真は、①小河内ダムサイトの原風景（東京都水道局HP掲載写真）、②2・26事件（クデーター軍の本部となった山王ホテル（現ブルデシタルタワー）、嶋津隆文オフィシャルブログ掲載写真）、③ケーブルクレーンの例（(株)南星ウィンテックHP掲載写真）

①



②



③

